

岩 波
英和大辭典

中島文雄編

岩 波 書 店

Copyright © Fumio Nakajima, 1970

岩波 英和大辞典

1970 年 1 月 20 日 第 1 版第 1 刷発行

¥3200

編 者 なか 中 じま 島 ふみ 文 お 雄

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

印 刷 者 澤 村 嘉 一

発 行 所 東京都千代田区 株式
一ツ橋 2-5-5 会社 岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

は し が き

私が、岩波書店より英和辞典編纂の依頼を受けたのは、今から13年前の昭和31年4月20日であった。私はこれまでに辞書改訂の仕事に関係したことはあったが、全く新しい辞書を編纂するという経験はなかったので、いささか躊躇したが、第2次大戦後の新しい世の中に新しい辞書を送り出すことは意義あることと思い、上野景福・宮部菊男両教授の協力を得て、この計画を進めることとなった。

原稿は、執筆者により多少の遅速はあったが、昭和36年頃にはほぼ完成した。しかしこれで一段落とはいかず、そのあとの原稿整理や校閲が予想外に困難な大事業となり、昭和39年になってやっと初校が出た。その理由の一つは、1960年代になって、英米で英語辞書の改訂版や新しい辞書が続々と刊行され、われわれとしては当然これを参考にし補筆改稿を繰り返さなければならなくなかったことである。

1960年代は英語辞典史上注目すべき10年間であると思う。主要なものだけを拾ってみても、アメリカでは *Webster's Third New International Dictionary* (1961), *The Random House Dictionary of the English Language* (1966), イギリスでは *Oxford Illustrated Dictionary* (1962), *The Concise Oxford Dictionary* (5th ed. 1964), *The Pocket Oxford Dictionary* (5th ed. 1969) が出版された。また語法・語源・発音に関しても Fowler の *A Dictionary of Modern English Usage* (2nd ed. 1965), Onions の *The Oxford Dictionary of English Etymology* (1966), Klein の *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language* (2 vols. 1966-67), Jones の *Everyman's English Pronouncing Dictionary* (13th ed. 1967) などがある。本辞典はこれらのすぐれた辞書の業績を適宜摂取している。わが国の英和辞典のうちで、もっとも新しい内容をもつものであると自負している。なお、使いやすように、外形は大辞典としては比較的小型につくられているが、1ページあたりの密度は高いつもりである。それで大辞典と銘打った次第である。

本辞典編纂の根本方針は、ことばの辞典としての性格を強調することにあった。古くは Oxford の大辞典、新しくは Webster の第3版が、ことばの辞典として徹底した方針をとっているが、本書もその系列にある。われわれは語義・成句・発音・語源などに重点をおき、百科事典的説明は簡略にした。固有名詞は、聖書・神話・伝説などに出てくるものや、普通名詞的用法のあるものは本文に収めたが、その他の地名・人名は、略語やクリスチャンネームの表とともに、巻末に付録としてあげた。辞書として、こういうものを欠いては利用価値を減じると考えたからである。本文の方は、現代語中心の語学的辞書として、基本的な動詞や、助動詞・接続詞・前置詞などの、いわゆる機能語には思い切って多くのスペースをあたえた。

語義の記述がどうあるべきかは、むずかしい問題であるが、本書ではなるべく精密に語義を区分し、検索や理解上の便宜を考慮して、妥当な順序に記載することにした。語義を正確に理解するためには、その語の用いられる文脈を知ることが必要である。単に語義を説明したり訳語を与えただけでは不十分であるから、本書は豊富な用例をもってこれを補うことにし、それもスペースの許すかぎりセンテンスの形で示すことにした。これに関連して当然成句の収録に力をそそぐことになった。すなわち慣用句や常套句、きまった型の挨拶の文句、諺や警句、また文学作品からの有名な引用句などから、前置詞を含む複合語的語群や、一般的な連語 (collocation) まで注意深く収録した。なお語義の前には《米》《俗》《英語》《方》《古》など、さまざまな用法指示語 (usage label) がつけてある。語の用法上の身分を示すことは、語義のニュアンスを知るのに必要なことである。

本辞典は発音表記や語源説明にも意を用いた。日本の英和辞書はどうしてもイギリス英語とアメリカ

カ英語と両方の発音を記載しなければならない。英米の辞書はそれぞれ独自の表記法を用いているので、われわれとしてはそれを無批判に転載することはできない。ただし英音については Jones の発音辞典の表記法がわが国では一般化しており、すべての英和辞書がこれによっているので、本辞典も英音は Jones によることにした。これを改めることには大きな抵抗があると思われるからである。われわれが Jones の最新版によったことは言うまでもない。そこで従来の表記法と大きく変わっているのは [ou] が [əu] になったことである。イギリス英語の Received Pronunciation (認容発音) に、そのような変化が見られるのである。

英音の表記は Jones 式であるといったが、われわれの辞書では単音節の語でもアクセント符をつけており、この点 Jones 式とことなる。たとえば Jones でただ [pen] とあるところが本書では [pén] となっている。Jones はこのアクセント符は省略しても誤解はおこらないと考えたのであろうが、at を [ət, æt] とするより [ət; æt] として強勢をはっきりさせた方がわかりよいし、事実 1 音節語も単独に発音されれば強勢があるのであるから、アクセント符をつけた方が理論的にも正しい。それから本書では複合語にもアクセント符をつけた。複合語は他の辞書では、独立の見出語となっている場合はとにかく、追込みになっているときはアクセント符のないのが普通である。本書ではあらゆる場合に丹念に強勢の所在を表記した。

米音については、わが国の英和辞書のあいだにまだ一定の表記法がない。表記の対象はアメリカ英語の一般型の発音であるが、どの英和辞書も Jones 式に多少手を加えた表記法を用いている。しかしこれは便宜的なものであって、原理的に考えられたものではない。英音の母音組織と米音の母音組織とは同一ではないし、子音においても /r/ 音に差異が見られる。それ故 Jones 式で米音を表記することには無理がある。そこで本書は米音表記に Jones 式とちがった約束の記号を用いることにした。記号の音価については「発音解説」を参照されたい。これを Jones 式で表記された英音と併記したので、一見両者のあいだに大きなちがいがいがあるように見えるが、それは理論上の差異によるところが大きいのである。他日英米両者を同一の記号体系で表記する方法を考えたいと思っている。

最後に語源のことであるが、本辞典の特色は、その語が本来の英語であるか外国からの借入語であるかを厳密に区別し、語形の変化を正確にたどることに努めた。そのため複雑な記号を使用しなければならなかった。語源専門の辞書は別として、普通の辞書で語源欄がこれだけ充実しているのではないと思う。かぎられたスペースのなかで、語形ばかりでなく意味の変化にも留意した。語の歴史が 15 世紀以前にさかのぼるものに対しては、初出の時代が OE か ME かを明記し、OE 以前にさかのぼり得る語には同族言語における対応語をあげることもした。16 世紀以後に現われる語であっても、日用語または語源上の必要のあるものについては、初出の世紀または年代を示してある。

以上が本辞典の編集方針であり、われわれとしてはその実現に全力をつくしたつもりである。もとより完全な辞書などはない。今後この辞典を利用される諸賢の御協力をえて改訂を重ねていきたいと思う。

思えば長い年月を要したものである。この難儀な仕事を遂行しえたのは、竹林・寺沢・小野・忍足の 4 君の責任感と学問的良心と強固な意志に負うところが大きい。また資料の蒐集・基礎原稿の作成に献身された別記の執筆者の方々、事務的・技術的な面ばかりでなく辞典の内容にも多大の関心を示され調査に校閲にわれわれを裨益するところが大きかった岩波書店辞典部の方々、ならびに印刷・造本について尽力された方々に心から謝意を表したい。

昭和 44 年 11 月

中 島 文 雄

編 集 主 幹

中 島 文 雄 東京大学名誉教授

校 閲 者

上 野 景 福 東京大学教授

宮 部 菊 男 東京大学教授

竹 林 滋 東京外国語大学教授

寺 沢 芳 雄 東京大学助教授

小 野 茂 東京都立大学助教授

忍 足 欣 四 郎 東京都立大学助教授

執 筆 者

青 山 誠 子 共立女子大学助教授

池 上 嘉 彦 東京大学助教授

井 上 章 子 北日本学院大学講師

加 藤 泰 三 東京理科大学助教授

加 藤 知 己 電気通信大学助教授

荻 部 恒 徳 新潟大学助教授

佐 久 間 浩 治 東京水産大学助教授

佐 久 間 信 成城大学助教授

沢 崎 和 子 東邦大学講師

菅 原 清 次 埼玉大学教授

高 橋 利 治 東洋大学助教授

豎 川 吉 英 防衛大学校助教授

長 井 善 見 東京大学助教授

橋 爪 茂 子 東京女子大学助教授

長 谷 川 欣 佑 東京大学助教授

松 井 倫 子 立教大学講師

三 宅 鴻 成蹊大学教授

山 口 静 一 埼玉大学助教授

英語の歴史

1. 英語の現状

1.1 英語は現在行なわれている世界諸言語のうち、もっとも広く話され理解される言語である。英本国(人口約5500万)およびアメリカ合衆国(2億)の2大国をはじめ、カナダ(2000万)・オーストラリア(2000万)・ニュージーランド(270万)・南アフリカ共和国(1900万)の国語であり、約3億の人によって話されている。そのうえ英語はフィリピン・パナマ運河地帯の公用語であり、パレスチナ・インド・マライ半島・アラブ連合地域、および旧英領アフリカにおいて用いられる。中央アメリカ・南アメリカでは、公用語としては英語を用いないまでも、商業や観光用には英語が行きわたっている。ヨーロッパがもっとも英語の勢力のよわいところであったが、今や北欧では英語がよく通じるし、フランスにさえ影響をおよぼしはじめている。ヨーロッパの学校で教える第一外国語もフランス語でなく英語になってきた。ソ連邦や中国でも英語教育はさかんであろう。

1.2 このような英語もアングロサクソン時代には人口200万ぐらい、近世初期においても500万ぐらいの島国の言語にすぎなかった。しかしその後、イギリスの国力増大と海外発展により世界的な言語になった。英語国民の人口は中国の7億、インドの5億には及ばないが、これらの国の言語は多くの方言にわかれ、相互に通じないことが多く、ことにインドでは同国人のあいだでも共通の言語として英語を用いるほどであって、英語の世界的な普及度に比較すべくもない。中世のヨーロッパにおいては、ラテン語が学問のことであり教会のことであり、学者のあいだでは国際語として通用した。近世になるとフランス語がフランスの国威や文化を背景に、ひろく外交上・社交上の言語として用いられ、フランス語の学習が各国において行なわれた。しかしだに英語が勢力を増大して、第1次大戦(1914-18)後のベルサイユ会議(1919)においては、英語がフランス語とともに外交用語であった。第2次大戦(1939-45)後の諸会議においては、各国代表が自国語を用いるようになったが、アメリカの世界強国としての発言権やアングロサクソン文化の優越性のために、英語の重要性はますます大きくなっている。現存の諸言語のなかから国際語をえらぶとすれば、英語が当然第一候補であり、現実にもそうってきている。言語そのものの性質としても、英語は以下に述べるように、語彙がコズモポリタンであり、語形変化が簡単であるという利点をもっている。ただしその綴字法が古風で、発音とよく一致しないのは弱点であろう。

2. 英語の時代別と方言

2.1 英語は印欧語族のゲルマン語派のうち、西ゲルマン語派に属し、その中で高地ドイツ語(High German)に対しオランダ語(Dutch)やフランドル語(Flemish)とともに低地ドイツ語(Low German)とよばれる分派をなす。ゲルマン語(Germanic)を東ゲルマン語(わかしのゴート語など)・北ゲルマン語(北欧の諸言語)および西ゲルマン語にわけるのが通説であるが、これを訂正した分類もある。本書の語源解説では、その分類法を採用してある(「語源解説」2.2)。

2.2 英語は低地ドイツ語として、もとは北海にのぞむ北ドイツの海岸地方に話された言語であったが、ゲルマン民族大移動の一つの波として、5世紀の中ごろから約100年にわたって、ジュート人(Jutes)・サクソン人(Saxons)・アングル人(Angles)が相ついでブリテン島に渡来し、先住民ブリトン人(Britons, ケルト系民族)を西部地方に駆逐し、いくつかの王国を立てて定着したので、英語(English)の原義はアングル語)がブリテン島の言語になった。紀元700年ごろから英語が文献に現われはじめる。英語の歴史はほぼ次のように区分される。

古英語(Old English) 700-1100

中英語(Middle English) 1100-1500

近代英語(Modern English) 1500-

2.3 もちろん言語の変化は漸次的であって、ある時期に急激に変化するものではないが、文献によって英語の変化をたどっていくと、上のような時代区分を認めることができる。1066年ノルマンジー公がイギリス王となってからは、フランス語を話す人が支配階級となったため、古英語の文学的伝統は断ち切れ、12世紀中期以後に現われる文献は、明らかに古英語とはちがった特色を示している。それで大体1100年をもって古英語と中英語の境界とするのである。英語の発音は15世紀に大きく変化しはじめたことが学者によって証明されている。しかし15世紀は文化的にはまだ中世であり、英語の文献も前世紀からの伝統をうけているものが多いので、明らかに新時代となったルネサンス期の英語あるいは過渡期の英語とし、1500年以後を近代英語とするのである。近代英語はさらにルネサンス期の終了する1650年ごろを境として初期近代英語(Early Modern English)と後期近代英語(Late Modern English)とにわけられる。20世紀の英語は現代英語(Present-day English)として別に扱うことができる。

2.4 古英語には4大方言が区別された。すなわち

(1) ノーサンブリア方言(Northumbrian) 北部

(2) マーシア方言(Mercian) 中部

(3) ウェストサクソン方言(West-Saxon) 南西部

(4) ケント方言(Kentish) 南東部

(3)はウェセックス王国(Wessex, 首都はウィンチェスター(Winchester))の言語で、今日残存する写本の大部分は、この方言で書かれている。北部・中部の写本は787年以降北欧の海賊の来寇により修道院が略奪されたさいに多く滅びた。ウェセックス王国も9世紀後半にはおびやかされたが、アルフレッド大王の努力により侵略者を撃退し、一時平和を保って文教が興隆し、ウェストサクソン語による著述やラテン語の翻訳、他方言で書かれた作品の転写などが活発に行なわれた。その後もこの方言で著作する者が多く、ウェストサクソン語は古英語時代における標準的な文学語となった。

2.5 ノルマン征服(Norman Conquest)によりこの標準語は廢用に帰し、再び英語の作品が現われたとき、それは各著者の方言で書かれた。中英語方言の分類は次のようにされる。

(1) 北部(Northern) 方言

(2) 東中部(East Midland) 方言

(3) 西中部(West Midland) 方言

(4) 南部 (Southern) 方言

(5) ケント (Kentish) 方言

文獻は各方言にわたっているが、14 世紀後半のチョーサーやガワールの英語は、もはや一方言にとどまらず、標準的な文学語に発達していった。この文学語はロンドン方言の上に立つものであるが、ロンドンは東中部方言・南部方言・ケント方言の混交する土地にあたるため、その英語は境界方言であった。中でも東中部方言はケンブリッジ・オックスフォード両大学をもその地域内に含み、文化的にもまた交通の上からも重要な位置にあるためもっとも有力で、ロンドン英語においても東中部の特徴がもっとも優勢な力だ。これが今日の標準語に発達する。

2.6 近代英語の時代には標準語がしだいに確立し、地域方言で著作がなされることはほとんどなくなった。スコットランドは 18 世紀初めまでイングランドとは別の国であったから、スコットランドの英語は、比較的ながく英語語に用いられたが、今では一方言にすぎない。近代においては教育や交通の発達につれて、地域方言はしだいに滅びつつある。文章ばかりでなく口語においても標準語が習得されていく。このように標準語が普及して全国の英語が統一に向かう反面には、標準語が地方により、また教育や階級によりさまざまな変容をうけるという事実がある。大都会の発達につれて地域方言は減少しても階級方言は増加し、少なくとも話しことばにおいては多様な変容標準語が行なわれているのが現状である。ただし発音については、教育ある人々、とくに public school 出身者の発音がよいとされ、これを学者は認容発音 (Received Pronunciation) とよんでいる。本書が英音としてあげている発音はこれである ('発音解説' 1.2)。アメリカ英語は、はじめ標準を英本国に求めたが、近時は教育ある人の話す中西部型の英語を一般アメリカ英語 (General American) と考えている。

3. アメリカ英語

3.1 アメリカ英語の歴史は、1607 年のバージニア植民および 1620 年のマサチューセッツ植民にはじまる。新しい環境のもとに本国の英語とは語彙において多少ちがった発達をしたが、独立 (1783) 後も文章語はイギリス英語を範としていたので、両英語の差異は目立たなかった。第 1 次大戦のころから国力の躍進とともに、アメリカ英語の重大性が増大し、また文学作品がアメリカの題材を口語体をもって表現するようになり、アメリカ英語の独自性が注目されるようになった。第 2 次大戦をへて、アメリカが世界的勢力となり、今やアメリカ英語がイギリス英語を圧倒して世界に普及している。

3.2 アメリカ英語は 3 つの型に大別される。

(1) 東部 (Eastern) 型

(2) 南部 (Southern) 型

(3) 中西部 (Middle Western) 型

(1) の東部型はボストンを中心としてニューイングランドに話される方言で、イギリス標準英語に近似しており、古い文化を背景とする洗練された英語であるが、アメリカ全体から見るときは、せいまい局部の方言にすぎない。(2) の南部型はバージニア州から南西部一帯、テキサス東部にもたつて話されるが、小方言にわかれ、文化的中心都市もなく洗練を欠く。(3) の中西部型というのは、ハドソン川以西のニューヨーク州、ペンシルベニアから西の太平洋岸にいたる広大な地域にわたる方言である。全国土の 4 分の 3、全人口の 3 分の 2 をしめる大方言であり、ニューヨーク・フィラデルフィア・シカゴ・サンフランシスコなどの大都会をふくむ。アメリカ英語として一般に考えられるのは、この中西部型である。イギリスの北部方言の系統をひく。この方言の上に、アメリカの教育ある人々が公的生活において用いる一

種の階級方言ができた。これが General American とよばれる型の英語である ('発音解説' 1.3)。

3.3 アメリカ英語はイギリス英語で廃用へ帰した古語をいくつか保存していると同時に、多くの新しい語や句を発達させている。基本的な文法は同じであるが、多少語法のちがう点もある。綴字法にもいくらかちがいがあ。General American の発音については、イギリスの Received Pronunciation とは別の音韻体系を認めなければならないので、本書でも両方の発音をあげてある ('発音解説' 3, '凡例' 6.1)。しかし、いろいろの差異はあっても、アメリカ英語はイギリス英語と本質的には同一であって、両者の差異を強調する必要はない。

4. 英語の語彙

4.1 英語はゲルマン語であるから、本来の英語彙はゲルマン系のものであり、これが今でも英語彙の中核をなしている。しかし英語のなかにはおびただしい外来語が入っている。古くはゲルマン人がローマ人との接触により借入したラテン語が、アングロサクソン民族とともにブリテン島にもちこまれた。古英語にさかのぼる street, wall, mile, wine, butter, cheese などはゲルマン系ではなく、もとはラテン語である。ブリテン島に移住後も先住民のブリトン人 (1 世紀中ごろから 5 世紀初めまでローマ人の支配をうけていた) から間接にラテン語を借入することがあり、6 世紀末のキリスト教改宗以後は、ラテン語の書物からラテン語を借入して英語としたものが相当あった。たとえば plant, rose, noon; offer; school, box, paper, turn など。このうち最後の 4 語 (一説では rose も) は上の butter とともにギリシャ語起源である。ラテン語の中にはギリシャ借入語が多いので、英語はラテン語を通してギリシャ語をも採りいれている。この事情は後世のラテン借入語についても同じである。このように古英語時代にもかなり外来語はあったが、全体的に見ると、英語彙の中心はまだまだほとんどゲルマン系の語から成っていたといえることができる。ラテン語は学者の言語であり、彼らはラテン語で著述することが普通であった。

4.2 アングロサクソンのイギリスを侵略した北欧の海賊は、9 世紀後半からイギリスに定着するようになり、また 11 世紀にはデンマーク王が一時英王位についたこともあり、彼らのことばも英語彙のなかに入ったが、その影響が文獻に現われるのは、主として中英語の時代になってからである。北欧からの借入語としては husband, sister, leg, skin, wing; call, give, take, want; ill, loose, low, ugly, weak, wrong など、それから代名詞の they, their, them などがある。このように日常的な語が多いのは、スカンジナビアの民族が同じゲルマン人と言語もよく似ており、イギリス人のなかにとけてんだことを示している。この系統の借入語が、あまり外来語の感じを与えないのは自然なことである。

4.3 1066 年のノルマン征服後、支配階級はフランス語を話し、フランス語またはラテン語の文学を読み、約 300 年のあいだ Anglo-French (イギリス化したフランス語) が宮廷・法廷・議会・学校の言語であった。しかしそのあいだにノルマン人はしだいに同化し、英語を母国語とするようになり、14 世紀後半にはアングロ・フレンチは公用語であることをやめ、英語がこれに代わるようになり、英語の文学もさかんになった。このようにして英語は失地回復をしたが、そのなかには当然多数のフランス語が含まれていた。そのフランス語はアングロ・フレンチのみならず、直接中央のフランス語から来たものもある。フランスとのあいだには王家の結婚や戦争などによって接触が多かったからである。このようにして中世の終りまでにフランス借入語は相当数にのぼった。本来ゲルマン語である英語の性格が、少なくとも語彙に関するかぎ

り、大いにフランス化したのはこの時期である。古いフランス借入語は全く英語になってしまい、基本的な語彙にも相当くはいこんでいる。たとえば *aunt, uncle, prince, people, sir, face, voice; flower, branch, fruit, forest; metal, rock, oil; appear, arrive, catch, change, cost, cover, cry, dance, doubt, enter, fail, finish, move, pass, pay, please, receive, remain, save, serve, study, try, use; able, clear, easy, fine, honest, just, large, nice, poor; very, quite, etc.*

4.4 中英語の時代にもラテン語は学者の用いた言語であるから、依然として英語に影響を与えている。しかしフランス借入語と同形で区別できない場合も多い。いづれにせよフランス語はラテン語から発達したものであるから、フランス語の本来の語彙はラテン語にさかのぼる。従ってラテン系とフランス系の借入語は同じ系統に属する。近代英語期になると、文芸復興の情熱がおびただしいラテン語を英語に採り入れた。ちょうど日本語集における漢語のように、ラテン系の語は英語の欠けくさる部分を占めるようになった。新規の借入ばかりでなく、すでにフランス語から借入していた語をラテン語の形に変えることも行なわれた。たとえば中英語で *parfait, parfait* (今のフランス語では *parfait*) を *perfect* としたように。綴り字だけラテン化して発音の方は影響されなかった語もある。たとえば *debt, doubt, indict* など。

4.5 近代における学術の進歩は、多くの学術語を必要とするようになったが、これにはギリシャ系の語が多く用いられた。これはヨーロッパの文化語に共通することであるが、ギリシャ系の要素をラテン化した語形を用いるのが習慣になっている(語尾や発音は各国語の性質を反映するが)。たとえば *psychology, anthropology, biology* のような近代の学問の名前は、*psychologia* などのラテン形を前提とするが、この近代的ラテン語の構成要素はギリシャ語である。のちに語源の意識がうすれ *sociology, mineralogy* のように第1要素がラテン語、*television* のように第2要素がラテン語といったギリシャ語との混雑語が造られている。近代の初期は、まだ学者がラテン語で著述した時代であるが、一方、英語も国家意識の目覚めにつれて重視され、英語の表現力を養い古典語に匹敵する言語に育てようという努力もなされた。意は洗練された語彙は豊富になり、フランス系・ラテン系(ギリシャ系を含めて)の語は、英語彙において大きな割合を占めることになった。ドイツ語やフランス語にくらべて英語の語数が多いのは、このように活発に外来語を借入したためであり、従って英語には類義語(*synonym*)がたくさんある。たとえば *help—assist, shut—close, stop—cease, put—place, try—endeavour, ask—inquire, sweat—perspire* など。

4.6 近代になってもフランス語は、その文化的優位のために依然英語に影響を与えたが、新しい借入語は多かれ少なかれフランス語の発音をとどめているので、古い時代のまったく英語化した借入語と区別される。たとえば *change, chant* の *ch-* は [ʃ] であるが、あとから借入された *machine, chef* などはフランス語式に [ʃ] であり、*restaurant, garage* などの発音もまだ十分に英語化していない。フランス語のはかにイタリア語・スペイン語・オランダ語などからもかなりの借入語があり、英国国民の海外発展につれてヨーロッパ諸国のみならず、全世界の各地と関係をもつようになり、それが英語彙に反映している。英語には極東の日本語・中国語も、南洋やオーストラリアやアフリカの土語も、またアメリカインディアン語も入っている。英語彙の性格はコスモポリタンである。

4.7 以上概観したように、英語の外来語のものはさまざまであるが、語源の立場から注意すべきことは、語源的には同じ語

でありながら別の語として用いられている二重語(*doublet*)が英語に多いということである。たとえば

{ <i>shirt</i>	{ <i>bench</i>	{ <i>whole</i>	{ <i>rear</i>
{ <i>skirt</i>	{ <i>bank</i>	{ <i>hail</i>	{ <i>raise</i>

上段は本来の英語、下段は北欧からの借入語である。また次の二重語

{ <i>feat</i>	{ <i>strait</i>	{ <i>abridge</i>	{(<i>e</i>) <i>state</i>
{ <i>fact</i>	{ <i>strict</i>	{ <i>abbreviate</i>	{ <i>status</i>
{ <i>count</i>	{ <i>sure</i>		
{ <i>compute</i>	{ <i>secure</i>		

においては、上段がフランス語から、下段がラテン語から直接の借入語である。さらにフランス借入語のなかに *Norman French (NF)* から入ったものと *Central French (CF)* から入ったものがあり、それが二重語をなすことがある。たとえば

{ <i>wage</i>	{ <i>warrant</i>	{ <i>catch</i>	{ <i>reward</i>	{ <i>cattle</i>
{ <i>gage</i>	{ <i>guarantee</i>	{ <i>chase</i>	{ <i>regard</i>	{ <i>chattel</i>

上段が NF、下段が CF からの借入語である。最後の二重語 *cattle—chattel* にはさらに OF の学者語からの借入語 *cap-ital* が加わるから、いわば三重語(*triplet*)をなす。語源的にもっと複雑な場合は、ゲルマン系の語がフランス語に借入され、それがまた英語に借入されたため本来語と借入語が二重語をなすことである。その借入語は NF からのことも CF からのこともあるが、両方からのこともあるので、そのときは三重語をなす。たとえば

warder (本来語)—*warden* (NF)—*guardian* (CF)

二重語の例は(上段が本来語)

{ <i>ward</i>	{ <i>wise</i>	{ <i>wile</i>	{ <i>yard</i>
{ <i>guard</i> (CF)	{ <i>guise</i> (CF)	{ <i>guile</i> (CF)	{ <i>garden</i> (NF)

さらに同じフランス語が異なる時期に2度借入され、二重語をなしている場合もある。たとえば

{ <i>chief</i>	{ <i>feeble</i>	{ <i>burgess</i>	{ <i>hostel</i>	{ <i>veil</i>
{ <i>chef</i>	{ <i>foible</i>	{ <i>bourgeois</i>		{ <i>voile</i>
{ <i>feast</i>	{ <i>suit</i>			
{ <i>fête</i>	{ <i>suite</i>			

上段が中英語期の借入語、下段が近代における借入語である。

4.8 英語の語彙の性格はこのような複雑であって、英語の本来語は外来語に圧倒されているように見える。事実、語数においては外来語の方がはるかに多いが、基本的な単語だけを取り出してみると、本来語の割合の方が大きく、しかもそのなかには代名詞や前置詞の大部分、冠詞、日常的な名詞・動詞・形容詞が含まれているので、その使用される回数は外来語よりはるかに多いといえる。基本的語彙に属する本来語を若干あげると、

father, mother, brother, daughter, son, wife, child, friend, man, woman, king, queen; arm, back, body, ear, eye, finger, foot, hand, head, heart, mouth, nose, tooth; cow, dog, fish, bird, bear, horse, ox, sheep; gold, silver, iron, stone, water; be, come, drink, eat, go, hear, kiss, laugh, learn, like, love, make, play, put, ride, run, say, see, sit, sleep, speak, stand, think, wash, work, write; good, bad, old, young, glad, sad, long, short, quick, slow, far, near, great, small, thick, thin, etc.

5. 英語発音の変化

5.1 現代英語の発音については後の「発音解説」にゆずることとし、ここでは古英語と中英語の代表的な発音を示し、それが現在の発音にどう対応するかを指摘して、英語の音変化を

概観することにする。まず古英語の発音からしるすが、ここを用いた音素記号は、本辞典が英音表記に用いている記号と同じである。ただ短母音 [e] の代りに /ɛ/ を用いたところだけがちがう。古い時代の発音については、いろいろ問題もあるが、ここでは触れないことにする。

5.2 古英語の音組織

母音音素

短母音		長母音	
/i, y	u	/i:, y:	u:
ɛ	ɔ	e:	o:
æ	a/	æ:	ɑ:/
/i/	i	cwíc (quick), wind (wind), sittan (sit)	
/ɛ/	e	etan (eat), settan (set), beran (bear)	
/æ/	æ	bæc (back), glæd (glad), fæder (father)	
/a/	a	nama (name), faran (fare), habban (have)	
/ɔ/	o	god (god), for (for), bodig (body)	
/u/	u	full (full), sunu (son), cuman (come)	
/y/	y	synn (sin), fyrst (first), cyning (king)	
/i:/	i	wín (wine), lif (life), ridan (ride)	
/e:/	ē	hē (he), grēne (green), fēdan (feed)	
/æ:/	æ	dæl (deal), tæcan (teach), hæl (heal)	
/ɑ:/	ā	stān (stone), hām (home), hlāford (lord)	
/o:/	ō	mōna (moon), gōd (good), tōþ (tooth)	
/u:/	ū	nū (now), hūs (house), mūs (mouse)	
/y:/	y	brȳd (bride), lȳtel (little), mȳs (mice)	

二重母音

/eə/	eo	heofon (heaven), eorþe (earth), weorc (work)
/e:ə/	ēo	dēop (deep), frēond (friend), cēosan (choose)
/ɛə/	ea	eall (all), heard (hard), ġeard (yard)
/ɛ:ə/	ēa	ēast (east), hēah (high), ġēar (year)
/ia/	ie	ieldra (elder), ġiefan (give), ċielle (chill)
/i:ə/	īe	hīeran (hear), niehst (next), (ġe)liefan (believe)

以上のうち ea, ie, īe はウェストサクソン方言に特有のもので、中部・北部では eall は all, ieldra は eldra, hīeran は hēran であり、現在の標準英語はこちらの発達である。

子音音素

/p	t	k	k
b	d	ġ	g
		ġ	
f	þ	s	h (þ は th に相当する rune 文字)
m	n		
	l		
w	r/		

/k̊, ġ/ は本来閉鎖音 [k, g] の口蓋化された音であるが、古英語期のあいだに破擦音 [tʃ, dʒ] になったと推定される。/ġ/ はわたり音 [j], /f, þ, s/ は摩擦音で [f, θ, s], 有声音のあいだでは [v, ð, z] と発音される。/þ/ は /ð/ と書かれる。/h/ は語頭では [h] であるが、語中・語尾ではドイツ語 ch の音 [x, ç]。同様に /g/ も語頭では [g], 母音間ではドイツ語 sagen の [ʏ], すなわち摩擦音である。古英語には /ŋ/ という音素はないが sincan [sɪpkan], singan [sɪŋan] など軟口蓋音 [k, g] の前には現われる。換言すれば現在では sing [sɪŋ] と発音されるが、古英語では [sɪŋg-] であったということである。

/k̊/	(ċ と書かれる, [tʃ] と読んでもよい)	ċild (child), ċirice (church), ċc (I)
/k/	[k]	catt (cat), cōl (cool), cū (cow)

/ġ/	[dʒ]	seng(e)an (singe), spreng(e)an ('sprinkle')
/ġġ/	(ċġ と書かれる)	eċġ (edge), bryċġ (bridge)
/g/	[g]	gold (gold), gōs (goose), ġēs (geese)
/gg/		frogga (frog)
[ɣ]		dragan (draw), boga (bow 弓), lagu (law)
/ġ/	[j]	ġēar (year), dæg (day), hālig (holy)
/h/	[h]	helpan (help), hlid (lid), hnutu (nut), hwæt (what)
		leoht (light), dohtor (daughter)
	[ç]	niht (night), riht (right)
/f/	[f]	lif (life), wif (wife)
	[v]	wifes (wife's), lufian (love)
/þ/	[θ]	weorþ (worth), þeof (thief)
	[ð]	weorþan ('become', G werden)
/s/	[s]	hūs (house), sittan (sit)
	[z]	hūses (gen. of house), cēosan (choose)
/w/	[w]	writan (write), grōwan (grow)
/sk̊/		(sc̊ と書かれる。古英語期の終りまでに [ʃ] となったと推定される) sċeal (shall), fišc (fish), sċip (ship)

5.3 中英語の音組織

母音音素

短母音		長母音	
/i	u	/i:	u:
ɛ	ɔ	e:	o:
	a/	ɛ:	ɑ: ɔ:/
二重母音			
/ei	oi/	/iu	ou
		eu	au/
/i/		quik (quick), sitten (sit); sinne (sin), king	
/ɛ/		bed, setten (set)	
/a/		bac (back), glad, that	
/ɔ/		god, for, bodi (body)	
/u/		ful (full), sone (son), comen (come), mon(e)k (monk)	
/i:/		wín (wine), lif (life), riden (ride); brid (bride), litel (little), mīs (mice)	
/e:/		hē (he), grēne (green), fēden (feed)	
/ɛ:/		tēchen (teach), hēlen (heal), ēten (eat), bēren (bear)	
/a:/		nāme (name), fāren (fare), dāme (dame)	
/ɔ:/		stōn (stone), hōm (home), hōli (holy), lōverd (lord)	
/o:/		gōd (good), mōne (moon), tōth (tooth)	
/u:/		hous (house), mous (mouse), croune (crown), now	
/ei/		dai (day), saide (said), wei (way), leide (laid), they	
/oi/		vois (voice), coy, poynt (point)	
/iu/		(1) stiward (steward, OE stigweard 'styward'), Tiwesdai (Tuesday, OE Tiwesdæg 'Tiw's day')	
		(2) [iu] from F [y:] nature, vertu (virtue), usen (use)	
		(3) [iu] from [eu] blew (OE blēow), knew (OE cnēow)	
/eu/		few (OE fēawe), lewed (lewd, OE lēwede)	
/au/		lawe (law), drawen (draw); daunce (dance), aunte (aunt), faute (fault), sauf (safe), auter	

(altar); taughte [táuxta] (taught)

/ɔu/ (1) [ɔu] *from* [o:w] growen (grow, OE grōwan), flower (flow, OE flōwan)

(2) [ɔu] *from* [ɔ:w] knowen (know, OE cnāwan), soule (soul, OE sāwol), bowe (bow, OE boga); boughte [báuxta] (bought), daughter (daughter), soughte (sought)

子音素

/p	t	tʃ	k
b	d	dʒ	g
f	θ	s	ʃ
v	ð	z	
m	n		
	l		
w	r	j	

子音素としては上の22が認められる。古英語の18より数がふえているのは、OE *sc* が /s/ として確立したこと、OE /f, þ, s/ が無声の /f, θ, s/ と有声の /v, ð, z/ という別の音素に発達したからである。ということは中英語において語尾の母音が強勢のないか弱まり、さらにそれが脱落することがおこり、ために *give, love* などの [v], *bathe, clothe* などの [ð], *rise, choose* などの [z] が語尾に立つことがおこり、無声音と対立するようになったからである。この傾向は近代英語になって一般化する。中英語に /ŋ/ がまだ音素として認められないのは、古英語の場合と同じ事情による。また /h/ も古英語と同じように語頭の [h] のほかに [x, ç] の異音がある。綴り字としては *h* または *gh* として現われる。例 *doughter* (OE *dohtor*), *night* (OE *niht*)。綴字法としては /tʃ/ が *ch*, /ʃ/ が *sh*, /θ, ð/ が *th*, /j/ が *y* という近代の綴り字がひろまってきたが、/dʒ/ は *liggen* (lie, OE *līcgan*), *brige* (bridge, OE *brycg*), *jugen* (judge) のように *gg* が用いられている。近代英語の綴字法には、発音されない子音字がいくつも残っているが、古英語・中英語においては、書かれている子音はみな発音されたと考えられる。

5.4 母音素の変化を概観すると、前記の表からわかるように、次の対応が見られる。

OE /æ/ /æ:/ /ɑ:/

ME /a/ /e:/ /ɑ:/

それから開音節 (open syllable) における OE /e/ と /ɑ/ は ME /e:/, /ɑ:/ と長母音になった。OE *etan*—ME *ēten* [é:tan], OE *nama*—ME *nāme* [ná:mə] のように。強勢のない音節の母音が *e* と書かれ [ə] に弱まったが、これが語尾において消失する傾向が中英語期のうちにじまった。OE *ȝ* は方言によって異なる発達をしたので注意を要する。すなわち

OE *ȝ*—ME $\begin{cases} \text{ȝ} & \text{(Northern and Midland)} \\ \text{ȝ} & \text{(Southern) (u または ui と書かれる)} \\ \text{ȝ} & \text{(Kentish)} \end{cases}$

このうち *ȝ* の発達が近代の標準英語の主流をなすので、前記の表には *ME sinne, king; brid, litel, mis* をあげておいた。今の *busy, build, bury* は綴り字に南部方言の形をとどめ、発音は [bɪzi], [bɪld] は中部方言, [béri] はケント方言のそれである。なお中英語の母音で注意すべきは二重母音の発達である。古英語においては二重母音の性格がまだはっきりしていないが、中英語にきて明らかに二重母音でできたと認められる。

5.5 中英語と近代英語を区別する大きな特徴として、「母音大推移」(Great Vowel Shift) とよばれる母音の大変化がある。しかし英語は、この変化を綴り字の上に反映していないので、いわゆるローマ字読みとは非常にちがった読み方をするようになったのである。その大体を示すと、

ME ModE ME ModE ME ModE

(1) /i:/ → [ai]

(7) /u:/ → [au]

(2) /e:/ → [i:]

(6) /o:/ → [u:]

(3) /ɛ:/ → [i:]

(4) /a:/ → [ei] (5) /ɔ:/ → [ou]

例は既出の表から

(1) wine, life, ride, bride, mice

(2) he, green, feed

(3) teach, heal, eat 今 (2) と同じ音であるが、綴り字に差異がのこる。

(4) name, dame

(5) stone, home, holy, boat, goat 今の英音では [əu] に移りつつあるので、本辞典ではこの表記をとっている（『発音解説』3.2.2）。

(6) moon, tooth これが [u] につまったものが *good, foot* など。さらに *blood, flood* のように [ʌ] になったものもある。

(7) house, mouse, crown, now (ou はもと [u:] を表わすフランス式綴り字であった)。

二重母音の ME /ei/ は [ei] に、/ou/ は [ou] → [əu] になったので、それぞれ (4) と (5) と同じ音になった。

/ei/ → [ei] day, way, laid

/ou/ → [ou] → [əu] grow, flow, know, soul, bow

それから /iu/, /eu/ はともに [(j)u:] になり、/au/ は [ɔ:] になった。

/iu, eu/ → [(j)u:] steward, Tuesday, use, blew, knew, few, lewd

/au/ → [ɔ:] law, draw

そのほか ME *boughte, taughte* の類はともに [ɔ:t] となった。ME *daunce, aunte* が現在 [ɔ:] になっていないのは、CF からの *dance* [dáns], *ante* [ánt] の発達だからである。ME /a/ は [æ] となって OE の発音にもどった (*back, glad, that* など) が、ある種の子音の前では [ɑ:] ともなった。それで *aunt* [ánt / ént], *dance, grass, master* などに2様の発音があるのである。

5.6 近代英語の子音素は24で中英語より2つ多い。それは /ŋ/ と /ʒ/ が加わったからである。/ŋ/ は ME *sinȝe* [sínȝə] の語尾がおち、ついで [ŋ] もおちて ModE *sing* [sín] となり、*sin* [sín] と対立するようになったので音素と認められるようになった。/ʒ/ は *measure, vision* などの [z + j] からの発達である。

6. 英語の文法

6.1 英語は発音において大きな変化をしたように、文法においても著しい変革を undergone。そして両者の変遷は無関係ではない。古英語は今のドイツ語におとらぬ屈折の豊富な言語であったが、中英語時代には屈折語尾の母音が -e [ə] に水平化され、近代英語においては失われるという発音上の変化は、英語を印欧語族中最も屈折の少ない言語としたが、それは同時に複雑な統語法を発達させることになった。

6.2 古英語の名詞には男性・中性・女性の3種類があり、また強変化と弱変化とにわけられ、そのおのが格と数によってさまざまな屈折変化をしたが、今では性の区別はなくなり、単数形と複数形の2形になっている。属格はまだ残存しているが一般的ではない。たとえば OE *stān* は強変化の男性名詞で、次のように変化した。

	単数	複数
主, 対格	stān	stānas
属格	stānes	stāna
与格	stāne	stānum

これが音変化により ME では

	単数	複数
主, 対格	stōn	stōnes
属格	stōnes	(stōne)
与格	stōne	(stōnen)

これが ModE stone, stones の 2 形になった。属格 stone's も用いられることはあるが、それにしても発音は複数の場合と同じである。発音は stān [stá:n] → stōn [stó:n] → stone [stóun] と発達するが ModE stone の綴り字は、本来与格のものであり、語尾の -e は前の母音をもとに開音節 (open syllable) にあったことを示している。複数形は stānas [stá:nas] → stōnes [stó:nas] → stones [stóunz] と単音節になり、[-nz] というような子音結合を生じた。単数属格の場合も同じである (英語の語尾に複雑な子音結合が現われるのは音変化の結果である)。

6.3 形容詞はもと名詞の性・数・格に一致して複雑な変化をし、それに強変化と弱変化とがあったが、比較変化を除けばいっさいの屈折語尾が消失した。英語の名詞から性の区別が失われたのは、形容詞の屈折変化がなくなったことに起因する。英語は性という不合理な文法的カテゴリーから脱却した唯一の印欧語であろう。

6.4 古英語の動詞には現在形と過去形とあり、それが主語の人称と数により、また直説法・接続法・命令法により十幾通りもの変化をした。今は現在形と過去形の区別と、直説法現在 3 人称単数に -s をつけることしか残っていない (動詞の屈折形にも単音節化が著しい、たとえば OE lufode → loved [lávd])。また古英語の現在分詞や過去分詞は、形容詞と同じように変化した。今では無変化である。また過去分詞はしばしば過去形と同一である。本来の強変化動詞と弱変化動詞の区別は、ある程度残存しているが、後者の方が規則動詞として優勢になっている。接続法の使用は少なくなっており、使用されとしても (アメリカ英語の方に多い) 語形上は基本形と同じである。

6.5 古い屈折をよく保存しているのは be, have のような特別な動詞、および代名詞である。人称代名詞は数と格に従って (3 人称単数の場合は性別もある) 変化し、指示代名詞

this, that も these, those と変化する。疑問代名詞 who も変化するが、whom は口語では who にとって代わられることが多い。このように特殊の語を除いては、屈折変化が大量に失われ、それだけ英語の文法は簡単になったわけであるが、その代りに語順が固定してきたり、前置詞や助動詞が発達し、文化の進歩とともに表現も精密になって、統語法は複雑になった。

6.6 前置詞の使用は古英語時代からあるが、名詞の格語尾の消失につれて中英語期に発達した。属格の代りに of を用いるようになったのもこの時代で、フランス語 de の影響があると考えられる。前置詞の用法はしだいに分化し、また on account of, for the sake of, in accordance with, by means of のような前置詞句が豊富になった。助動詞の使用も古英語時代からあるが、これを用いてさまざまな心的態度や時制的確に表現するようになったのは後の発達である。動詞の接続法の代りに法助動詞 (modal auxiliary) を用いることにより、心的態度のニュアンスはかえって詳しく表現される。また古英語の時制としては現在と過去しか認められないが、近代英語では shall, will, be going to, used to などを使いわけ、また have + 過去分詞や be + 現在分詞で動詞の種々相を表わすようになり、動詞の用法は複雑になった。

6.7 近代英語の大きな特色の一つは、屈折語尾消失のため語形上の品詞別が動揺し、品詞の転換が自由になったことである。たとえば round という語を引くと形容詞・名詞・動詞・副詞・前置詞と 5 つの品詞としての用法があげられている。どの品詞であるかは語形でなく統語法によってきまってくるのである。近代英語においては名詞を動詞に、動詞を名詞に用いることは頻繁に行なわれる。本来の名詞 book, head などがそのまま動詞になるし、本来の動詞 cry, kiss, look, swim, talk などがそのまま名詞としても用いられる。現代の英語において盛んに行なわれている造語法、すなわち名詞を並列して合成語をつくることも、屈折語尾消失のため容易になったものと考えられる。新聞を見れば the Communist summit conference, a collective security treaty, a Middle East peace settlement, the Asia Economy Research Institute など例はいくらでも見出される。これも英語表現の特色の一つである。

語源解説

1. 語源とは何か

1.1 語源 (etymology) とは語の形式 (発音) と意味の変化・発展の経過を可能な限りさかのぼることによって明らかにされた、文献上または文献以前の推定された最古の語形と意味である。そして、語源学 (これも etymology とよばれる) はそのために特定言語の歴史的研究および比較言語学の方法と成果を利用する。従って、英語を対象とした語源学は、単語を中心にした英語史・比較言語学ということができよう。

1.2 たとえば, father [fá:ðə(r)] ‘父’の英語史内での語源が OE fæder [fæder] ‘父’であることは、英語音韻史のまさしく証明するところである。説明の順序が逆になるが、OE fæder の fæ- は開音節 (open syllable) にあるため ME fæ-der と

長音化し、これは ‘母音大推移’ (Great Vowel Shift) の結果 ModE [féide] (方言) に発達すると予想される。しかし、事実は ME で閉音節 (closed syllable) をなす屈折形 fæder(s) の類推によって生じた fād-er [fáder] が一般化し、さらに 1400 年ごろ母音と r の近くにある [d] がおそらく [ð] をへて [ð] に変化するという音変化 (cf. mother, weather, hither, together) によって [fáðer] となり、最後に初期 ModE で [ð-r] の前の a の長母音化と語尾の r の標準英語における消失とによって [fæ:ðə] をへて今日の [fá:ðə] となったと説明される。father の語源が OE fæder であると断定するためには、このように語形・発音の各時代における連続性と同時に、意味の連続性が証明されなければならない (father の場合基本的意味は変わっていないので意味の連続性は自明である)。それ

では father の前英語史的事実、つまり OE *fæder* の語源はどうか。OE にさかのぼる語の中には dog の場合の後期 OE *docga* のように、現在の段階ではこれ以上語源をさかのぼることのできないものもあるが、同語派に属する諸言語の同族語 (cognate words) を明らかにすることによって、その語源をさらにたどっていくことが可能なものも少なくない。OE *fæder* の場合もゲルマン諸言語の祖語であるゲルマン (共通) 基語 **fǣder* に、さらにまた印欧諸言語の祖語である印欧 (共通) 基語 **pǣtēr* にさかのぼり推定される (* をつけた基語の形は文献にはなく、学者が現在知られているデータに基づいて厳密な方法で導き出した推定形である)。われわれはここで印欧比較言語学の助けを借りなくてはならない。

2. 印欧語族とは何か

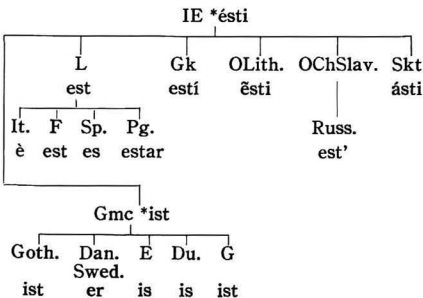
2.1 たとえば *be* 動詞の 3 人称単数現在に当たる形を、いわゆるロマンス語とよばれる諸言語、イタリア語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語などについてみると次のようである。

It. *è* / F. *est* / Sp. *es* / Pg. *est-ar*

特別の予備知識がなくても、これらの語の間に見られる明らかな類似性から、われわれはこれらの語が一つ語に由来するのではないかと想像したくなるであろう。事実、もとは一つのラテン語 *est* から、最初は方言として派生したものなのであって、このことは文献によって確かめることができる。一方、ゲルマン語とよばれる諸言語について、英語の *is* に当たる形を調べてみると、

G. *ist* / Du. *is* / Dan. & Swed. *er* / (Goth.) *ist*

などであることが分かる。デンマーク語とスウェーデン語の *er* を除けば、この場合にも語形と意味の類似は明瞭であり、Dan. & Swed. *er* もその古い形 (ふつう古ノルド語 (Old Norse) という) が *es* であることを考えれば、これらの語が、ちょうどロマンス諸語の語形がラテン語にさかのぼるように一つのゲルマン語に由来すると想像できるであろう。この場合のいわゆるゲルマン基語は文献上は確かめられないのであるが、ゴート語を始めとする多数の同族語から学者は **ist* という形を推定している。そのほか Gk. *estí*, Russ. *est'* ... というふうにさらに広い領域にわたって見出される類似形から、われわれは以上の諸言語の語形すべての語源として、一つの基語 *x* の存在を期待できるのである。結論的にいえば、さらに古リトアニア語 (Old Lithuanian) の *ēsti* や今日のインドで用いられる諸方言のもとをなす古い文学語サンスクリット (Sanskrit) の *āsti* などを含めて、その語源である印欧基語 **ēsti* が推定されているのである。これを図で示すと次のようになる。

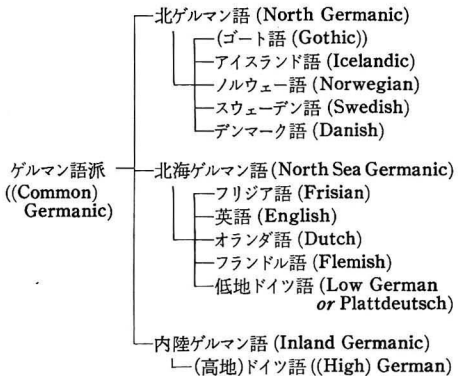


2.2 このよき考え方に立て、広範囲に多くの語について、その形態・音韻・意味の対応、さらに文法構造の対応関係を体系的に比較研究することによって、比較言語学は上にあげた諸言語が同じ一つの語族、つまり印欧語族 (Indo-European

family) に属することを証明するのである。この印欧語に関する研究は、イギリスの東洋学者 Sir William Jones が司法官としてインドに在任中サンスクリットの研究に手を染め、1786 年にサンスクリットがギリシャ語やラテン語と著しい類似性をもつことを指摘して、これらの各言語が同一の源 (印欧語) から派生したのではないかとという仮説を発表したのに始まる。以後、比較言語学者の研究や古代語の発見によって、今日では印欧語族の系譜はかなり明らかになっている。次に参考までに印欧語族の分類と、それに属する主要な言語名をあげておく (このほか今世紀になって発見解読されたトカラ語 (Tocharian), ヒッタイト語 (Hittite) も印欧語族に属すると考えられる)。

- (1) インド-イラン語派 (Indo-Iranian)
(サンスクリット) — (プラークリット) — インド諸方言
(古代ペルシア語) — ペルシア語
- (2) バルト語派 (Baltic)
(古プロシヤ語) — リトアニア語, ラトビア語
- (3) スラブ語派 (Slavic)
(古教会スラブ語) — ロシア語, ポーランド語, スロバキア語, チェコ語
- (4) アルメニア語 (Armenian)
(古アルメニア語) — アルメニア語
- (5) アルバニア語 (Albanian)
- (6) ギリシャ語 (Greek)
- (7) イタリア語派 (Italic)
(ラテン語) — イタリア語, フランス語, スペイン語, ポルトガル語, ルーマニア語
- (8) ケルト語派 (Celtic)
(ゴール語), (古アイルランド語) — ウェールズ語, ブルターニュ語, アイルランド語, ゲール語, マン島語
- (9) ゲルマン語派 (Germanic)

英語の属するゲルマン語派はわれわれにとってとくに重要なので、これを図式的に示しておく。



上図でおおよそ上下の近い言語ほど、言語間の親近性が濃く、したがって英語はゲルマン語の中でも、フリジア語やオランダ語・フランドル語ととくに類似性をもつことになる。

2.3 このように、英語がドイツ語・オランダ語などと共にゲルマン語派に属し、そのゲルマン語派は、さらに東はインド、西はアイルランドにわたる旧大陸の大部分の地域で用いられる諸言語と共に、(おそらく紀元前 3000 年以前には) 単一の言語であったと考えられる印欧基語にさかのぼることが論証されているが、これは前にもふれたとおり、個々の単語の形と意味の類似や言語構造の散発的の符合というような偶然的あるいは恣意的なデータによるものではない。いま印欧比較言語学の方法に詳しく

ふれる余裕はないが、それは「ある言語のある時期において、同一の条件下にある音はすべて同じように、体系的に変化する」という、いわゆる音法則 (sound law) の存在を前提とし、一定の言語における歴史的音変化や他の言語との間の音の組織的対応 (類似性のみならず、差異についての体系的対応) を公式化することによって、はじめて得られるものである (‘英語の歴史’ 5.4, 5)。

2.4 ここで参考までに、英語の単語で印欧基語にさかのぼれるもののうち主なものを列挙してみよう。(身体の部分) arm, ear, eye, foot, head, heart, knee, nail, navel, tooth; (家族関係) father, mother, brother, sister, son, daughter, widow; (動物) bear, beaver, bee, cow, ewe, fish, goat, goose, hart, hound, mouse, raven, sow, wolf, feather, nest; (植物) alder, ash, asp, bean, beech, birch, fir, hazel, withy; (天体) sun, moon, star; (数詞) one...ten, hundred; (代名詞) I, me, thou, ye, it, that, who, what; (動詞) come, do, eat, know, murmur, ride, seek, shave, sit. いずれも日常生活に密着した語ばかりで、このほかにも, name, dream; mead, loaf; year, month, night; fire, thunder, snow, wind, east; ax(e), acre, fee, furrow, wain, yoke; new, naked などを加えることができる。これからわかれわれは印欧民族の原始的生活の一端を垣間みることも可能である。たとえば night があって day がいないのは、印欧語では日を数えるのに‘夜’を用いたからであり, snow という語があるのは、印欧民族の居住地が雪の降る地域であり、穀物や野菜の特定の種類をさす語がないのは、彼らが主に肉食生活をしていたためと想像される。その意味で語源学は文化史などとも深い関係をもつといえる。

3. 本辞典の語源記述の範囲

3.1 以上のような複雑な語源的事実を、本辞典のようなごく限られたスペースに表わそうとする場合、大胆な簡略化が行なわれなければならないのは当然である。一般的にいって、英単語の歴史に関する部分の記述は専門的知識を要求するので簡略にし、語の英語内における語形・発音および意味の変化・発達に焦点をしかねることが、英和辞典の語源記述には望ましいと思われる。しかし、与えられたスペースでは語内の発達を記述する余裕はほとんどない。そこで、英語内における一般的变化は英語音韻史などの基礎的知識 (‘英語の歴史’ 5) によって理解できるといふ前提に立て、われわれは結局英語内における原形 (OE または ME の語形、ただし ME の語形は省略した場合が多い) とその意味、および語の前身としてはゲルマン・印欧の基語をあげる代りに同族語の 1, 2 をあげてその基語形を暗示するに止め、また他の外国語からの借入語の場合には、その外国語との接点を明らかにする、そして英語史における重要性を考えて、とくにロマンス借入語を比較的详细に記述することにした。

3.2 まず本来語の場合、もう一度 father を例にとると、本辞典では [OE fæder (→G vater / L pater)] のように、まず OE 形を与えたのち、基語の形は与えず、ゲルマン語派同族語としては読者の便宜を考えて G vater をあげ、また他の語派に属する同族語としては英語と最も関係の深い L pater で代表させてある (→は‘比較・参照せよ’の意味、/ は同族語の区切を示す)。この記述は、本来 father の英語内における語源である OE fæder がゲルマン基語 *fādēr, *fādēr (これは OE のほか OHG fater, OS fadar, ON faðir, Goth. fadar などと同族語から再建される) をへて、印欧基語 *pōtēr (これは Gmc *fādēr や L pater, Gk patēr, Skt pitā- などから再建される) にさかのぼるという前史語源的事実を背景とし、ある

いは含意しているのである。いいかえれば、本辞典の極めて簡略化された語源記述は、ゲルマン・印欧比較言語学の基礎的知識を前提とし、逆にその前提的知識があれば、この語源記述からある程度の語源的事実を読みとることもできるはずである。そこで、英語とゲルマン語およびゲルマン語と印欧語とを関係づける音法則を、簡単に説明しておかねばならない。

4. ゲルマン語と印欧語

4.1 ゲルマン語派を他の印欧語派から明確に区別する特色に、‘子音推移’と‘アクセントの固定’ (および‘動詞・形容詞の弱変化’) とがある。子音推移というのは、イギリスではしばしば発見者にちなんで Grimm’s law とよばれ、ゲルマン諸語と、古典語をはじめ他の印欧語族の言語との間に存在する規則正しい子音変化の体系のことで、おそらくこの変化は紀元前 3-2 世紀ころに完了したと考えられている。これを分かり易く、印欧基語の子音を保存するラテン語と推移した体系を表わす英語の例によって示すと次のようである。

(1) 印欧基語の無声閉鎖音 [p, t, k] はゲルマン語派で摩擦音 [f, θ, x] となる。

(IE)	L	(Gmc)	E
[p]	pater	[f]	father
[t]	trēs	[θ]	three
[k]	cornū	[x]	horn

(2) 印欧基語の有声閉鎖音 [b, d, g] はゲルマン語派で無声化して [p, t, k] となる。

(IE)	L	(Gmc)	E
[b]	labium	[p]	lip
[d]	duo	[t]	two
[g]	fāgus	[k]	book

(3) 印欧基語の有声帯気閉鎖音の [bh, dh, gh] はゲルマン語派で帯気性を失って、[b, d, g] となる。ただし、これらの音はラテン語では f, f, h, またギリシヤ語では ph, th, kh となっている。ギリシヤ語の例も加えると、

(IE)	Gk	L	(Gmc)	E
[bh]	phrātēr	frāter	[b]	brother
[dh]	eruthrós	rūfus	[d]	red
[gh]	khōrtos	hortus	[g]	garden

4.2 これら 3 種の子音変化は、有声帯気閉鎖音 [bh] → 有声閉鎖音 [b] → 無声閉鎖音 [p] → 無声摩擦音 [f] のような変化の方向をもっているといえる。ところで、(1) の規則に反して、印欧基語の [p, t, k] がゲルマン語派で [f, θ, x] とならずに、その有声音 [v, ð, γ] となることがある。たとえば L pater: E father において、語頭の p:f は問題ないが、語間の t:th の対立はどうであろうか。綴り字から見ると、一見規則に合っているようであるが、これはいわば偶然の一致に過ぎない。というのは、father の OE 形は前にもあげたとおり fæder であり、これは *fādēr にさかかのである。IE [t]: Gmc [θ] の対立を認めなくてはならないからである。このような例外的な音の対立はほかにもあり、結局 (1) の規則は、‘印欧基語の無声閉鎖音 [p, t, k] はゲルマン語派で無声摩擦音 [f, θ, x] または有声摩擦音 [v, ð, γ] となる’と修正されるべきことが分かった。この現象をデンマークの言語学者 Verner は、アクセントの位置との関係から次のように説明した。語中の IE [p, t, k] はその直前にアクセントがあれば無声の [f, θ, x] であるが、その直前にアクセントがない場合、すなわちアクセントが [p, t, k] の後にあるか、またはその前の前にあるときは、[f, θ, x] は有声化して [v, ð, γ] となる。この変化を OE fæder について図式化してみると、IE *pōtēr > Gmc *fādēr > *fādēr > *fādēr > OE fæder となる。(ゲ

ルマン語派においてはまず子音推移が(部分的に)行なわれ、その後でアクセントの語幹母音への固定が行なわれたと推定される)。

4.3 上のような知識があれば、われわれは個々の語形・意味の単なる類似から語源関係を想像する間違いを免れることができる。たとえば、英語の *have* に対してラテン語の *habere* は語形・発音のはか意味・用法もよく類似しているけれども、上の規則から E [h] (h) : L [k] (c), L [h] (h) : E [g] (g) の対立が要求されることが分かる。事実 *have* は IE **kap-* にさかのぼり、従って L *capere* 'to hold, take' (cf. *capture*) に、L *habere* は IE **ghabh-* にさかのぼり、従って E *give* に対応する。同様に E *day* と L *diēs* とが形・意味の類似にかかわらず、語源上無関係であることも推定できるであろう。また英語の *beef* と *cow* は語源上の関係がまったくないように見えるけれども、いずれも IE **gʷou-s* にさかのぼることを語源学は教えている。IE **gʷou-s* が Gmc **k(w)ō-z* をへて OE *cū*, ModE *cow* となったのに対して、ラテン語の方言で IE **gʷou-s* は語頭子音が唇音化して L *bōs* となり、これが OF *boef* に発達、英語に借入されて *beef* となったわけである。

5. 英語とドイツ語

5.1 ゲルマン語派は印欧基語から上のような子音推移をへたのであるが、今日の標準ドイツ語である高地ドイツ語では、さらに第2の子音推移が起こった。その結果、ドイツ語の子音組織は他のゲルマン諸語に対して特異なものとなった。これは英語とドイツ語を比較する場合、極めて重要であり、また本辞典ではゲルマン語派の同族語の代表としてドイツ語をあげてあるので、簡単に説明を加えておく。

- (1) ゲルマン基語の [p, t, k] は(高地)ドイツ語で摩擦音あるいは破擦音 [f] (f, ff), [pf] (pf); [ts] (z, tz), [s] (s, ss, ß); [x, ç] (ch) となる。

(Gmc)	E	G
[p]	<i>apple, help</i>	<i>apfel, helfen</i>
[t]	<i>heart, what, water, hot</i>	<i>herz, was, wasser, heiß</i>
[k]	<i>book, I</i> (OE <i>iċ</i>)	<i>buch, ich</i>

- (2) ゲルマン基語の [θ] (þ) は(高地)ドイツ語で [d] となる。これは低地ドイツ語・オランダ語でも同様。

E	<i>think</i>	<i>brother</i>	<i>that</i>
G	<i>denken</i>	<i>bruder</i>	<i>das, daß</i>

- (3) ゲルマン基語の [d] は [t] (t, tt) となる。

E	<i>do</i>	<i>death</i>	<i>god</i>
G	<i>tun</i>	<i>tod</i>	<i>gott</i>

5.2 しかし、この第2子音推移は第1子音推移にくらべ、不徹底な点が多く、地理的にも限定されていることに注意する必要がある。これと直接の関係はないが、英・独語の子音の比較という点で、OE 後期に起こった口蓋音化 (palatalization) に注意しておこう。英語におけるこの子音変化の結果、英語では他のゲルマン語の喉音 (guttural) に対して、しばしば口蓋音 (palatal) (ときに [j]) がみられることとなる。

E	<i>bridge</i>	<i>bench</i>	<i>yard</i>	<i>maid-en</i> (OE <i>mægden</i>)
G	<i>brücke</i>	<i>bank</i>	<i>gart-en</i>	<i>magd</i>

6. 外来語の受容

6.1 これまでに扱った語は、主にゲルマン基語、あるいはさらに印欧基語にまでさかのぼりうる、いわば直線的系譜をもった語であったが、これに対して、英語にはある時期に異なる言語か

ら輸入された外国語が非常に多い。前者を本来語 (native words) というのに対して、後者はふつう外来語または借入語 (loan words) などとよんでいる。英語は OE 時代以来今日に至るまで、ラテン語をはじめほとんどあらゆる言語から自由に借入を行なって、その結果最も豊富な語彙をもつ言語となった。ある人はこれを、「言語的消化不良の慢性症」とやや皮肉な言い方をしているが、とにかくこの包摂的受容性は、英語の大きな特色の一つといつてよい(『英語の歴史』4)。

6.2 本来語と借入語の区別は、言語の音韻・意味の変化、同義語や文体の問題にかかわる重要な問題であるが、ここでは語源の立場から、外国語が英語に借入されときの接触の型、とくに外国語が英語に入るときに語形・音変化を考えてみたい。借入語が完全に英語化して、英語と同質的に感じられるようになれば、あとは本来語とまったく同じ音変化を受けるが、借入時の接触の時点では、借入の型は原語によって必ずしも同じでないからである。

6.3 概略的にいえば、外来語は屈折語尾の部分を落とした語幹の形で借入し、これに必要なならば本来語の語尾を加えるというのが一般の借入の型である(この際語幹の部分でも何らかの音変化を受けるのがふつうであるが、今はふれずにおく)。たとえば、L *cāse-us* は OE *ċēse* 'cheese', L *torn-āre* は OE *turn-ian* 'to turn' に、また ON *knif-r* は後期 OE *cnif* 'knife', ON *vant-a* は ME *want-en* 'to want' にいうように、ただし、ときに ON *skam-t*, *van-t* (いずれも中性名詞) からの ME *skant* 'scant', *want* のように語尾を含めて借入されることもある。近代から現代にかけては、とくに名詞の借入語は屈折語尾をもった原形のままで借入されることが多い: *alb-un*, *cact-us*, *volcan-o*, *sag-a*。

6.4 以下に、ロマンス系借入語、とくにラテン語とフランス語からの借入の際の主な型を説明しておく。

6.4.1 ラテン借入語 ラテン語の動詞は、大別して不定詞 (*inf.*) の語幹から借入する場合(主に第1変化動詞)と、過去分詞 (*pp.*) の語幹から借入する場合とがある。たとえば L *corump-ere* (*inf.*), *corru(m)pt-us* (*pp.*) は両方の語幹が ME に借入されて *corrupt-en*, *corru(m)pt-en* 'to corrupt' (-en は ME 不定詞の語尾) となっている。過去分詞語幹からの借入は一見奇妙に思われるけれども、これは本来、過去分詞(形容詞) *corru(m)pt* として借入されたのである。ラテン語では -t- は英語の -ed に当たる過去分詞語尾なのであるが、英語では *corru(m)pt* では過去分詞ということが十分明瞭ではないので、さらに -ed をつけた *corru(m)ptid* のような形が作られた。現に Wycliffite Bible (c 1382) では写本によって *corrupt*, *corru(m)ptid*, *corumped* という3種の過去分詞形が同一テキストの異文として用いられている。そしてこの *corru(m)ptid* から逆に -id 'ed' を取って *corru(m)pt-en* という新しい不定詞形ができ、この型がやがて一般化したものと考えられている。多くのラテン語動詞は ME から近代初期にかけて両方の型が借入されたが、ふつうはどちらかが廃用となった。(1のついた方が廃用語) *introduce* (1475-)—'*introduce* (1481-1670); *texagger* (1535-97)—*exaggerate* (1533-)。中には意味の分化を伴いながら、両方の形が用いられているものもある(その際 *pp.* 型の方が限定された特殊な意味をもつことが多い): *emend* (1411-)—*emendate* (1876-) ('とくに) 本文校訂をする'; *convince* (1530-)—*convict* (1380-) ('とくに) 罪を悟らせる、有罪と決定する'; *transfer* (1382-)—*translate* (a 1325-) ('とくにある言語から他の言語に移す'。 *translate* についての本辞典の語源記述を引用すると、

[ME <L -ātus (*pp.*) <trānsferre TRANSFER]

< は派生その他の造語の関係を示すもので、ME *trans-*

late(n) (ここでは省略) が L *transfere* の過去分詞 *trans-latus* (ここでは見出語との共通部分は略し、-atus としてある) から造られた動詞であることを示している。また, *transfer* が小頭字体になっているのは, *transfer* の語源欄をみればそこにその語源が与えられているから参照せよ, という意味である。

ラテン語の名詞・形容詞はふつう主格ではなく、屈折形の語幹で借入されている。本辞典では対格 (accusative case) の形をあげ、必要に応じて主格形 (nominative case) も次に併記してある。

6.4.2 フランス借入語 1066 年の Norman Conquest 以後, フランス語の北部方言である Norman French (= ONF) がイギリスの支配階級・上流階級の言語となったため, ME を通じておびただしいフランス語が借入され, ME 後期から近代にかけての Central French (= (O)F) の流入とあいまって, 英語を少なくも語彙に關しては著しくロマンス語化してしまった。このことがなければ, 英語は当然直接的同族語であるドイツ語やオランダ語とまったく似ていたはずである。

まず, フランス語の動詞からの借入は, 不定詞の語幹・現在分詞の語幹・過去分詞の語幹などからとられているが, とくに現在分詞の語幹 (これは直説法現在複数語幹と同じ) からの借入が少なくないのに注意を要する。

finish [ME <OF finiss-, finir *finish* <L finire]

上例で finish は OF finir の現在分詞 finiss- の借入であるが (<は借入, <は発達の関係を示す), フランス語の [s] が英語では口蓋音化して [ʃ] となっている。この類推で現在分詞幹が -is(s)- に終わらないものでも, 英語で -ish となることがある (astonish, publish)。不定詞幹の例をあげると,

engage [(15th c) <F ~r. GAGE¹]

F ~r の ~ の部分は見出語と同一であることを示すので, これは結局 F engager と読まれる。

push [ME <AF *pusser...]

上例ではフランス語の [s] がやはり口蓋音化して [ʃ] になっており, また次の例では語尾の部分を含めて取り入れられている。

render¹ [ME <OF rendre <VL *rendere...]

不定詞は語尾を伴った形では, 名詞として英語に借入される方がふつうである (dinner, rejoinder)。過去分詞幹からの借入はあまり多くないが, close, paint などの例がある。

次にフランス語の名詞・形容詞の借入形の問題であるが, その前に OF の名詞・形容詞の組織について一言しなければならぬ。OF の名詞・形容詞はラテン語の 5 ないし 6 種の格変化のうち, なお 2 種類の格・主格と対格を残していた。代表的な名詞の例として murs 'wall' と bers 'baron' をとると,

	単数	複数
主格	murs, bers	mur, baron
対格	mur, baron	murs, barons

結論的に言うと, 現代フランス語の名詞・形容詞は OF の対格の発達であり, また ME に借入された OF の形も, ラテン語の場合と同様対格の方であった。後の場合に対する理由の一つとして, ME の名詞組織に対応するのは名格の系列であったことをあげることができる。本辞典から少し例をあげると,

art¹ [ME <OF ~ <L ~em, ars *skill, art*]

OF art が L ars の対格 artem の発達 (語尾 -em は鼻音化して消失) であることは言うまでもない。しかし例外的に OF の主格から借入されることもある。

fierce [ME <OF fiers <L ferus(nom.)]

ちなみに, フランス人の人名 Louis 'Lewis', Charles, Jacques 'James' などの -s は単数主格の -s の名残である。

注意すべきは, 上にラテン借入語のところであげた語の多くは, フランス語を通じた借入として [ME <OF ... <(または <) L

...] のようにも考えられることである。たとえば, ラテン語不定詞幹からの借入としてあげたものは, *transfer* のように OF *transfer-er* からとも考えられ, 実際にはラテン語から直接入ったのか, フランス語を介したのか不明なことが多い。本辞典ではなるべくフランス語の形をあげるようにし, また <F... or L... のような記述をしたところもある。

また, ME におけるフランス借入語には, パリの中央フランス語 ((O)F) でなく, ONF あるいは Anglo-French (AF) からの借入があることは前に述べたが, そのような場合, ONF または AF に対して OF の形を次のような形で併記してある。

reward [ME <AF & ONF ~ (n.) <~er(v.) = OF regarder REGARD]

なお ME のフランス借入語は, ルネサンス期にしばしばラテン語式に語形を再構成されることがあった。この関係を表わすのに本辞典では次のように ∞ (replacing と読む) を用いてある。

perfect [(15th c) <L ~us (pp.) ∞ ME <OF perfit]

これは ME では OF perfit の借入である perfit, parfīt (ここでは略) が用いられていたが, 15 世紀に L perfectus に倣って現在の形が用いられるに至った事情を示している。この ∞ の記号は他の類例の場合にも, しばしば利用されている。

get [ME <ON ~a get, beget ∞ OE -gietan ...]

これは OE -gietan (ふつう begietan のように複合動詞として見出される) から発達した ME ȝeten (ȝ は [j]) が, ON geta (g は [g]) に取り代えられたことを表わしている。なお本来 Old Norse (ON) とよばれるものの文献はごく断片的なものしかないもので, ふつう Old Icelandic の形を代用してあげてある。

7. 意味変化の類型

7.1 はじめに述べたとおり, ある語の語源を明らかにするためには, 音変化の連続性と同時に, 意味変化の連続性が確認されなければならない。しかし, 意味変化は言語的原因のほか, 心理的・社会的などの複雑な原因によることが多いので, 音法則のような体系的法則を求めることは困難である。

7.2 一般に, ただ一つの意味しかもたないような語は科学上の学術語などを除いてはまれであって, 多かれ少なかれ多義的なものがふつうである。ある語の発音が繰り返し使用されている間に少しずつ変化していき, 長い間には著しい変化をみせるように, 意味もまた連想作用などによって目に見えない変化を重ね, ついにほとんど逆の意味を生みだすことさえある。次に, 語の意味がどのように変化するかをみるために, 意味変化の主な類型をあげておく。

(1) 特殊化と一般化 これは意味の範囲の変化であって, 修辭学でいう synecdoche に当たる。たとえば, fowl は OE, ME では一般に '鳥' を表わしたが, 16 世紀以後その一部である '家禽', さらに '鶏' の意味に限定され, また本来 '穀物' を表わした corn が, イングランドでは '小麦', スコットランドでは 'からす麦', アメリカでは 'とうもろこし' という特殊な意味を発達させたように (cf. success '結果' → 'よい結果' → '成功')。これに対して, 本来 '仮面' を意味した person が '仮面をかぶる' 役者 → へて一般的に '人' を表わすようになったのは意味の範囲が拡大・一般化されたものであり, 固有名詞の普通名詞化 (cf. Caesar; maudlin (a.)) も同じように考えられよう。

(2) 向上と下落 これは言語使用者の語の内容に対する態度の変化を表わすもので, 本来 '召使い, 下級の役人' を意味した minister (minis- は minor と関係がある) が '大臣' を表わすようになったのは, 意味の向上の例であり (cf. knight, nice), 一方 silly は OE では '祝福された, 幸福な' (cf. G selig) の意味であったのが, 15 世紀以後意味が下落して '愚か

な'などの意味を表わすようになった。

(3) 弱化と強化 本来の意味が、長い間使われている間に薄れ弱まってくる例は、もと「直ちに」を意味した *soon* などに見られる。強調の副詞が OE *swidhe* (← *swiðh* 'strong') → ME *full* → ModE *very* のように変わったのも、語の本来の強調性が失われ、別の語によって置き・補強されたことを示す例である。これと逆の強化の例は、強調語として用いられる *rather* などに見られるが、これはふつう *understatement* (修辞学では *litotes* '緩叙法') とよばれるものである。

(4) 比喩的転用 (1)–(3) は同一概念領域内での意味変化であったが、これは異なる概念領域への転化を示すものである。これは *cigar* ('せみ' → '葉巻') や、本来、味について用いられた *sweet* が、'（見て）美しい'、'（聞いて）快い'、'（嗅いで）かぐわしい' というように転用される *metaphor* によるものと、容器 ↔ 中身、材料 ↔ 製品、抽象 ↔ 具象という意味の横すべりを表わす *metonymy* によるもの (cf. *bottle* 'びん' → '酒', *sail* '帆' → '船', *bronze* '青銅' → '銅像', *authority* '権威' → '政府、当局', *heart* '心臓' → '勇気') とがある (1) を参照)。

以上は、語の意味の変化の様態を A → B という単一相においてみたわけであるが、実際にはこれらが複数のにからみあって、

意味の変化を複雑にしている。われわれはそのような観点から意味変化の分類・類型を考えなくてはならないが、今は割愛しなければならぬ。

8. 表記法

最後に表記法について一言する。OE の子音の上につけた点は、その子音が後期 OE までに口蓋音化したことを示す: *ǣ* [tʃ], *sc̥* [ʃ], *cg̊* [dʒ], *g̊* [j]。また OE や ON の *þ* (thorn) と *ð* (eth) は、OE ではともに *th* で、ON では無声の場合は *th*、有声の場合は *dh* で表わしてある。ラテン語の長母音には長音符 (macron) をつけ、ギリシャ語ではさらにアクセントを記した。ラテン語の *i*, *u* が子音を表わすときは ML の習慣に従って *j*, *v* を用い、ギリシャ語のローマ字転写に当たっては慣用的なラテン語化をさせて、*κ* (kappa) は *c* でなく *k*, *χ* (khi) は *ch* でなく *kh*, *υ* (upsilon) は *y* でなく *u* で表記してある。その他の外国文字の表記にも、それぞれの慣用に従いつつ、できるだけ正確な表記を試みたつもりである。その他、語源欄の読み方については、'凡例' 7 を参照されたい。

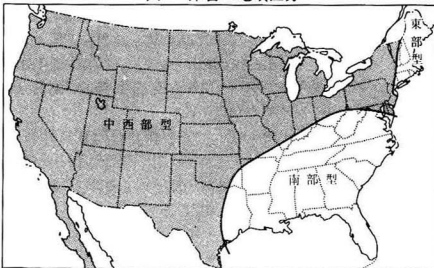
発音解説

1. 標準英音と一般米音

1.1 本辞典の発音表記は、20 世紀中期の今日、イギリスおよびアメリカで行なわれている標準的な発音を示すものである。多くの語ではその発音は必ずしも固定しておらず、語によっては数種の発音が聞かれるが、原則として、一語につき、英・米それぞれ、もっとも普通の発音を一ずつ示すこととした。

1.2 イギリスの標準発音として採用したものは、しばしば認容発音 (Received Pronunciation, 略 RP) と呼ばれ、ロンドンを中心とする南部イングランドの教育ある人々によって話されているタイプの英語の発音である。Received とは '上流社会に受け入れられている' という意味で、元来は中上流階級子弟の大学予備校としての性格をもつ *public school* で教育を受けた南部イングランド出身者が日常用いる発音であるが、他の地域の出身者でも大学教育を受けた人々の多くは、多少の地方なまりを残しつつ、このタイプの発音を用いている。また、教育・文化・放送関係の人、ことに BBC 放送のアナウンサーも使用

図 1 米音の地域区分



しているため、使用人口の比率は必ずしも高くないが、文化的優越性をもつ階級方言として、現在では、実質的にイギリスの標準発音と見なされている。以下これを英音という。

1.3 上記のイギリスの標準発音に相当する意味での、アメリカの標準発音は存在しない。アメリカの発音は、大まかに、地域的に東部型・南部型・中西部型の 3 つに分けることができる (図 1 参照)。中西部型は、米本土大半の地域にわたり、人口の上では約 3 分の 2 にのぼり、しばしば一般米語 (General American, 略 GA) とよばれる。本辞典の米音は、この広範な中西部地域の教育ある人々の発音を意味している。

2. 子音記号

	両唇音	唇歯音	歯裏音	歯茎音	歯口蓋硬音	軟音口蓋	声門音
閉鎖音	p, b			t, d		k, g	
摩擦音		f, v	θ, ð	s, z	ʃ, ʒ		h
破擦音					tʃ, dʒ		
鼻音	m			n		ŋ	
流音				l			
半母音		j		r		w	

2.1 閉鎖音 (stop) 口腔のある部分が閉じられ、呼吸によって閉鎖が開放されるときに生ずる音。

[p] (無声), [b] (有声) 上下の唇の閉鎖が開放されるときの音。'ペ行' 'バ行' の子音: *pen* [pén], *happy* [hápi]